草の根の表現者たち（第６回）　　佐藤一子（さとう・かつこ）

世代を超えて集い、夢を育む古民家ホール　宮崎県高鍋町の「野の花館」

おやこ劇場の活動から誕生した古民家ホール「野の花館」

宮崎駅から日豊線で 30 分ほど北上した静かな城下町高鍋町に、古民家を活用した文化ホール「野の花館」がある。宮崎県おやこ劇場連絡会の会員たちが地域の文化活動や子どもたちの遊びの拠点を創ろうと「夢構想委員会」を立ち上げ、1992 年に宮崎県高千穂町土呂久から築 120 年の古民家を移築して設立した。「夢構想委員会」が知り合い通じて空き家などを探してこの古民家に出会い、3 千万円の寄付を集めて自分たちの夢を実現したのである。

会員の自宅敷地の提供を受け、改修工事で能舞台が敷設された。150 人ほどが集うことのできる広間と畳 1 畳のいろり、黒々とした柱や梁、天井、大屋根をもつ野の花館は、NPO 法人の運営による手づくりの文化的企画を実施し、子どもたちがのびのびと遊ぶファンタジー空間として町内外から親子づれなどが訪れ、互いの絆を育みながら今日にいたっている。

広い庭には四季を通じて野の花が咲き、その一角には竹藪がある。子どもたちはこの庭で花を摘み、竹を切り出していろいろな遊びを楽しんでいる。親子で行事に参加し、保育園や幼稚園の子どもたちが散歩やお泊り保育でやってきて、ゆったりとした時間を過ごす。野の花館では、春の野の花館祭りや夏の平和を語るつどいなどの定例行事がおこなわれるほか、もちつきや月見、庭の野草を摘んで親子で料理、織物のワークショップ、映画会（野の花館シアター）、芸術家・創造グループによる一人芝居やコンサート、人形芝居、踊り、朗読の会など、年間を通じてさまざまな催しがおこなわれている。

以前は南九州大学が高鍋町に立地しており、学生たちがスタッフとなって放課後の子どもたちの居場所づくりの活動を支え、共に楽しんでいた。またこの古民家が建っていた高千穂町土呂久の人々は、土呂久砒素鉱害訴訟の運動や地域再生のための有機農法を通じて野の花館とのつながりを深め、地域の農産物加工品を持ってしばしば訪れている。砒素鉱毒について考えるアジア人ネットワークも広がり、モンゴルやベトナムなどアジア諸国から若者たちもやってくる。

「設立趣意書」に書かれているように、野の花館は「風、空気、鳥たちに会いゆっくり心を伸ばす…ときをわすれてゆったりくつろげるところ」「わらべうた、伝承遊び、庭づくり、野の花御膳…おとなもこどももみずからあそびたくなるようなところ」である。「月夜の下でのコンサート、まわりの自然を舞台装置にしたお芝居…ここでしか見られないもの！　美術館、絵本、映画会など」を自由に楽しむ場所として、生活に密着した居場所、世代を超えて互いに育ちあう文化創造空間として四半世紀の歩みを刻んでいる。

晩秋の定例行事「いろり開き」

2015 年 11 月 3 日午後から野の花館で「いろり開き」がおこなわれ、50 名以上が参加した。

幼児から小中学生、親たち、祖父母まで、この行事を毎年楽しみにしている三世代にわたる人々である。「いろり開き」は設立当初からの恒例行事のひとつであり、火起こしをしていろりに火入れをする。冬の間の安全を祈って神事をおこなうのが慣例で、今回は日本舞踊と和楽器演奏の井上大輔・聖子さん夫妻（花まるにっぽん座）が安全祈願をして舞を舞った。日常は地域で有機農業を営んでいる大輔さんが、自作の詞を唱える。

「わたしたちとおなじからだとこころをもつたくさんの人たちが／よろこびを生む火ではなく／よろこびを無くする火をもって傷つけあったり／殺しあったり／うばいあったりしている／わたしもそのひとりかもしれない／だからこそ今日はこのいろりの火をともそう」。

それから子どもたちが木の道具で火起こし、なかなか火がつかず難儀をしながらいろりに火が入る。その火で焼いたおむすびをおやつにして、子どもたちは絵本遊びや外遊びを始める。いろり端では地元の女子中学生 3 人のバリ舞踊や、夏に野の花館で初めてライブ演奏をしたという厚地逸枝さんのピアノの弾き語りがおこなわれた。小さな子ども 2 人を膝にのせながら、身体全体で演奏を楽しんでいる母親の姿もあった。夕方には野の花館の運営委員たちが朝から下ごしらえをしておいた野の花ご膳と土呂久からのお土産の煮物やしいたけが出され、いろりで暖をとりながら夜遅くまで子育て談義、交流がはずんでいた。

「遊ぶ・文化を創る・共に育つ」ファンタジー空間

NPO 法人野の花館（2000 年創立）の定款には、次のような事業の推進がかかげられている。①子どものための文化・芸術の鑑賞及び創造、②地域における個性豊かな文化の創造、③地域の文化振興・交流、④地域の環境保全・創出、⑤伝統的な生活文化の継承、⑥文化活動をとおして人権の擁護、平和の推進の活動支援など。地域やおやこ劇場のつながりを生かして、これまで里山自然体験や賢治の学校、子育て支援や文化講座、ミニコンサート、創作劇、朗読会、ワークショップなどを実施してきた。マルセ太郎さんやまついのりこさんなど著名な芸術家も招かれている。

大きな事業は財団や行政の助成金を取得し、日常的な活動は手づくりで協力しておこなう。敷地の提供者、則松節男さんは「館があったからこそやってこられた」「無理のない身の丈にあったやり方で進めてきた」と語る。妻の和恵さんは高鍋おやこ劇場の中心メンバーで、4 人の子どもを育てながら母親たちと共に野の花館の運営にかかわってきた。結婚や転勤で宮崎に来て、参加するようになった人も少なくない。

節男さんも定年後に積極的に協力するようになり、2012 年からは毎月野の花館シアター（映画観賞会）を開催している。昨年夏の平和のつどいでは初めて自らの戦争体験を語った。

ローカルに活動する小さな劇団・楽団や、公演の機会になかなか恵まれないフリーの芸術家たちとの関係を大切にして、上演の機会をつくっていることも野の花館の運営の特色といえる。近年では、町内の出身でモスクワに留学していた稲田由香里さん（ピアノ）と東京出身でやはりモスクワに留学し、現在宮崎県交響楽団・宮崎シティフィルの一員である竜斗さん（バイオリン）夫妻のコンサート開催を支援し、高鍋町未来づくり事業の助成を得て、高校・中学校な

ど町内の全学校で年間 6 回の公演を継続的に実現している。

いろり開きに集った人々は「野の花館は来る人たちがみなあたたかい」「家族みんながお世話になって自分のもとになるものを築いてこられた。ずっと一緒に成長してきたという感無量の思い……」と振り返る。時間をかけて共に歩んできた人々の語らいは尽きない。

＜写真＞　いろり開きで火起こしをする子どもたち・野の花館全景（筆者撮影）